

【曲目解説】

交響曲第3番 ハ短調 作品78 ; ルイ・シュポーア

ルイ・シュポーア（本来の名前はルートヴィヒ・シュポーア）は、1784年ドイツ・ブラウンシュヴァイクに生まれ、1859年ドイツ・カッセルで亡くなったヴァイオリニスト・作曲家です。ドイツ人でありながら、名前をフランス風にルイ・シュポーアと名乗る様になったのは、超一流の演奏家として活躍するようになった頃といわれています。ヴァイオリニスト・作曲家・指揮者として当時もっとも著名な音楽家の一人として活躍しました。また、指揮者として最初に指揮棒を使い、作曲にアルファベットの太文字による練習番号を用いた最初の作曲家でもあります。『顎あて』の発明者であることも知られています。ベートーフェン（1770年生）とも親交があり、交響曲第7番や戦争交響曲の初演にも参加しています。

交響曲10曲（10番は未完）、ヴァイオリン協奏曲15曲、多くの室内楽、歌曲やオペラ等も含め、生涯に150曲以上の作品を残しました。年代的には初期ロマン派ですが、優雅であり、感情表現も控えめな作品の性格から、懐古的・保守的傾向の作曲家とみなされ、後世では決して高い評価を受けていたとは言えないようです。しかしながら近年徐々に彼の作品を取り上げる演奏家がでてきました。アメリカの若手ヴァイオリニスト／ヒラリー・ハーンはパガニーニ（1782年生）のヴァイオリン協奏曲とカップリングでシュポーアのヴァイオリン協奏曲第8番を録音していますし、昨年のアルブレヒト指揮・読響定期演奏会ではシュポーア特集を行っています。この時演奏されたメインプログラムが、本日演奏する交響曲第3番です。

4楽章構成ですが…1楽章はなんとなくメンデルスゾーン風、2楽章はちょっとシューマン風、3楽章もメンデルスゾーンを思い出させ、4楽章はベートーフェンの交響曲第2番の終楽章に…でもちっともドイツっぽくなく端正な中に洗練されたメロディがちりばめられ、おしゃれな音楽に仕上がっています。このおしゃれなところに少しフランスの香りがするように思います。演奏家になって‘ルイ’とフランス風に名乗っていたのは、彼のフランスへの憧れだったのかもしれませんが。本日はどうぞ優雅な気持ちで、シュポーアをお楽しみ下さい（Va. fs）

交響曲第3番 変ホ長調 作品55 「英雄」 ; ルートヴィヒ・ファン・ベートーフェン

「英雄交響曲」冒頭の2回打ち鳴らされる和音は、この壮大な交響曲の開始を告げると共に、その次に来るロマン派音楽への道を開くものとなります。この曲は、ベートーフェン（1770・12・16?〈洗礼は12・17〉～1827・3・26）の最高傑作の一つにとどまらず、音楽史上欠くことのできない、名曲中の名曲であります。その構成、内容、表現とも、限界まで練り上げられ、畏るべき深み・高みに達しています。後世への大きな影響もむべなるかなと思わせます。

この作品は、またベートーフェン自身にとっても、深い意味を持つものであります。周知のごとく、ベートーフェンを生涯悩ましたのが、耳の病です。音楽家にとって致命的とも言える、耳がほとんど聞こえないという状況は、25歳くらいからその兆候を現し、次第にその度を増し、若きベートーフェンを絶望へと突き落とします。彼は、「ハイリゲンシュタットの遺書」を書き、死を意識します。そんなベートーフェンを救ったのは、やはり「音楽」だったのです。「英雄」は、ナポレオンではなく、ベートーフェン自身の精神であり、また万人一人ひとりの心に内在するものでありましょう。「英雄交響曲」はなんとしてでも書き上げなければならず、それに至る道は自分で切り開かねばならなかった、ベートーフェンは立派にそれを成し遂げ、自らを救い、人々に貴重な財産を齎したのです。

第1楽章は、まるで交響詩のような結構で、先ず「人間」の持つ、力強さと優雅さ、思索と決断力…が、描かれます。そして「人間」に一つの困難が訪れます。それを力強く乗り切ったかと思えば、さらに大きな障害に出会って打ちのめされ……、しかし、彼はまた立ち上がります。そんな「人間」の姿、営み、努力が鮮やかに表現されています。

第2楽章は、何と「葬送行進曲」です。ベートーフェンは、この交響曲で、人生の俯瞰図を描こうとしたのかも知れません。一人の「人間」の営みは、次の世代に受け継がれ、変容し、また復活し、新たな命を得る。歴史的な金字塔、「英雄交響曲」は、輝かしい「人間讃歌」となって結ばれます。（S）